

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 飯田篤司

飯田篤司氏の学位請求論文「プラグマティズム宗教哲学の帰趨——リチャード・ローティ宗教論の射程」は、現代アメリカの代表的プラグマティズム哲学者であるリチャード・ローティの宗教理解についての、詳細なあとづけと分析および評価・批判の試みである。

現代の宗教をめぐる状況は、諸宗教が競合しあうと言う意味でも、あるいは知の諸立場との競合のなかにおかれていると言う意味でも、とくに強く「多元的」な状況として特徴づけられる。本論文はこの二重の多元性に注目し、そこでの新たな宗教の在り方や宗教理解にとっての重要な示唆をローティの宗教哲学から読み取ろうとするものである。プロテスタント・リベラリストとしてのローティの立場は、一言でいえば、「私的」な活動としての宗教は、この二重の多元性があるがままに受け入れつつ、同時に、より「有用」ないし「有効」な在り方を求めて継続的に対話を行うべきだ、というものである。氏はそのようなローティの立場を、「真理」追求型の伝統的な宗教哲学とのローティの対決、ウィリアム・ジェイムズ、ジョン・デューイなどアメリカ・プラグマティズムの先駆者たちからの継承・発展や相違、ローティ哲学そのものへの諸批判、などを広汎に検討しつつ、多角的に明らかにしたものと言える。この点から、本論文は、プラグマティズム宗教哲学の研究において現在まで手薄な状態にあるわが国学界にとっての注目すべき成果として高く評価しうる。と同時に、審査過程では氏の研究におけるいくつかの問題点も指摘された。そのうちもっとも重要なものは、氏の研究はまだかなりの程度において「ローティ紹介」に止まっており、氏がローティ宗教論をいかに評価・批判するかの点においてはやや弱いこと、ローティの宗教論は、ローティ哲学そのものにおいては比重が軽く、ゆえに、現段階のローティ宗教論をもって現代アメリカ・プラグマティズム宗教論を代表させることは難しいこと、また、より広く現代アメリカの宗教哲学や現代欧米の宗教哲学におけるローティの位置付けが十分ではないこと、などである。

このような問題点を残すものの、氏の研究は上述のように基本的にはプラグマティズムの宗教理解の重要性をローティに即して、新たに、また説得的に示すことにおいて成功しており、したがって、本審査委員会は本論文を「博士(文学)」の学位を授与するにふさわしいものとして認める。